

2019年度 ブルーマウンテンズ市派遣留学報告書

はじめに

多くの皆様のご支援やご協力のもと、私は、7月25日（木）から8月8日（木）の2週間の間、三田市の姉妹都市である、オーストラリアのブルーマウンテンズ市に三田市の派遣留学生として訪問させていただきました。その内容をオーストラリアの教育や学校の様子を中心に報告させていただきます。

1. ブルーマウンテンズ市

ブルーマウンテンズ市と三田市は1988年（昭和63年）8月30日に姉妹都市の調印を行いました。その後、毎年親善大使として派遣留学生を2人ずつ派遣しています。ブルーマウンテンズ市はシドニーの西に位置しており、南半球にあるため日本とは季節が逆で、訪問時は冬でした。朝晩はとても寒く、今日は少し寒いな～と思いつつ気温を見ると、5度の日がありました。しかし、昼の間は比較的に暖かく過ごしやすい気候でした。自然環境は三田市に似て、自然豊かでした。



ホストファミリーの高校生と

8月5日（月）にブルーマウンテンズ市長への表敬訪問がありました。

とても緊張しましたが、優しい笑顔で温かく迎え入れていただいたことで、ほっとしました。市長との懇談では、準備していた三田市の地図を出し、三田市の特産品（母子茶・うどんなど）のことなども紹介することができました。

この後、ブルーマウンテンズ国立公園、スリーシスターズを訪問しました。写真で見ると迫力があり、日本の山脈よりもスケールが大きく、さすが世界遺産に指定されているだけのことはあるなと思いました。



ブルーマウンテンズ国立公園とスリーシスターズ（点線○印）

2. 学校について

私が2週間通った学校は、ウィーンマリーハイスクールという公立の学校で、12歳から18歳までが学んでいます。オーストラリアの学校は4学期制で1月から始まります。この学校は1授業が75分と日本の高校より長いです。そして、固定のクラスがなく、自分の取りたい授業を選択して受けるという日本の大学のような制度を取っていました。

この学校に通っていた時に驚いたことが5点ありましたので紹介します。

1つ目は何とんでもなく授業に対する生徒の積極性です。先生に当てられなくても、自主的に挙手をし、発言し、先生のミスを発見したらこれ見よがしに指摘し、先生を納得させるまで話し続けるなど、日本の学校ではあまり見られないことがありました。やはり生徒が自ら学びたいと選択した授業を受けている分、日本の学校と比べてモチベーションに差が出てくるのかもしれませんが。

2つ目は、先生が生徒の自主性に任せていることです。授業中居眠りしている生徒や、音楽を聴いている生徒などいましたが、先生方は特に注意することなく授業を進めていました。全校集会にあたるアッセンブリーという行事では、司会進行は勿論のこと、内容や使用されるプレゼンテーションなどほぼ全てが生徒に任されていました。他にも、学校にスケートボードを持ってきている生徒や、お昼に食べたリンゴの芯を「自然に返す」と言い学校の芝生に投げるなど面白い行動をとる生徒もいましたが、自由と自治がしっかりした、自主性を重んじる学校だと思いました。



学校前にて

3つ目は授業全般についてです。公立の高校にもかかわらず、各教室にプロジェクターが設置されており、スクリーンを使って授業を行うという方法が、随分前から行われていました。また、インターネットを使い調べ学習を頻繁に行い、授業中にスマホは勿論のことパソコンなども自由に使用していました。数学の授業では、日本で



は、3けた×2けたなどの複雑な計算になっても電卓を使わず暗算や筆算などで計算しますが、この学校ではすぐに電卓を使い、何とか暗算でと思っていた私も文明の利器の速さと楽さに負けて使ってしまいました。他にも、美術の授業中に音楽をかけたいと生徒が言い出し、先生の許可を取って教室のスピーカーから音楽を流すなど私にとっては驚きの連続でした。

4つ目は、学校が始まる前と昼食の風景です。学校に食堂はなく代わりにパンショップがあり、お昼など食事は教室の外で取る決まりになっており、朝や昼休みは多くの生徒が外でサッカーやフリスビーをしたり、食事を取ったり、たくさんの生徒で外があふれかえっています。私は外でしか食事が出来ず、さらに不意打ちのようにボールが飛んで来る光景に驚いていました。

5つ目は授業の時間についてです。前の授業の終わりと始まりの時間が同じなので、最初時間割を見た時、印刷ミスかチャイムが少し早く鳴るのだろうと思っていました。しかし、チャイムは早く鳴らず、終わりと開始のまとめでの一回のみでした。日本ではチャイムが鳴る前には着席、チャイムと共に点呼のため初めの方はチャイムに焦らされましたが、周りのみんなは、各自のペースで次の教室に向かっていったため、最後の方には、焦らされず自分のペースで教室に向かうよう慣れてしまいました。夏休みが明け、学校が始まったらオーストラリアのペースに慣れてしまい、少し不安です。他にも、毎週同じ授業ではなく、2週間でワンクールだったり驚きの絶えない学校生活でした。この学校における自分の取りたい授業を選択して取るという点は日本の高校にも必要ではないのかと思います。

私の学校生活を振り返ってみると、最初の1週間はホストファミリーが女子生徒だったこともあり、一緒に行動する機会が多かったため学校では周りが女子生徒ばかりで、他の人と積極的に話すことが出来ませんでした。2週間目に入り、自己紹介のプレゼンテーションをアッセンブリーで行い、そこで話したドラゴンボールや漫画の話について話に来てくれた生徒や、プレゼンテーションを褒めてくれた生徒など、沢山の生徒たちがフレンドリーに話に来てくれたため、最終日には多くの友達ができ、もう1週間ここに居たいと思うようになりました。



家庭科の授業風景（週1回は必ず調理実習がある）

3. オーストラリアでの1日の過ごし方

平日

家から学校までが徒歩3分のため、朝は7時に起床し朝食は各自好きなものを食べました。私はほぼ毎日、ホットケーキか食パンにハチミツをかけてトーストを食べていました。日本では毎朝、ご飯だったため白いご飯が恋しかったです。その後、8時20分に家を出て学校に向かいました。時間割どおり学校生活を過ごしました。この学校はクラブがないため15時に家に帰りました。ホームステイ先から学校が近かったため私は徒歩でしたが、多くの生徒は車での送迎や、スクールバスなどで帰っていました。帰宅後、周辺を散歩したり、ホームステイ先でおやつを食べたり、テレビを見たりなどし、個々の時間を過ごしました。その後、ホストファザーとマザーが仕事から帰ってきて夕食になります。仕事は4時半に終わり帰宅時間は大体5時半くらいでした。終業時間が日本と比べて少し早いと感じました。夕食では、肉料理が多く、おかずや野菜のボリュームもありました。私にとってつらかったのは、お茶がなく出てくる飲み物がほとんど炭酸だったことです。しかし、苦手だと思っていた炭酸飲料ですが飲んでいくうちに、炭酸に慣れていき飲めるようになりました。夜は、シャワーを浴びます。湯船につかりたいと思いましたが、まさかの浴槽がなく、シャワーで我慢しました。就寝時間はすごく早く22時にはみんな寝てしまいました。私は、そんな早く寝ることが出来なかったため、日記をつけたり本を読んだり英会話の本を読んだりして24時に就寝しました。



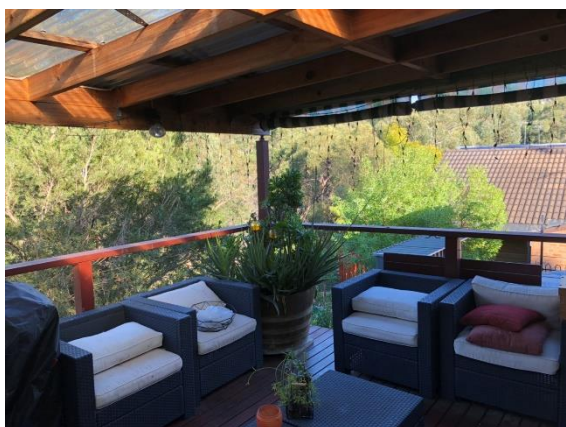
ある日の夕食

休日

朝9時前に起床し、最初の土曜日はホストファミリーがしているネットボールの試合の観戦しに行き、実際にやってみたり、午後から近くの家の子ども達と近所の散歩をしたりVRゲームをしたりしました。日曜日も9時前に起床して教会に行き午後からラグビーの観戦にも行きました。最後の土曜日もネットボールの試合を見に行きそこで仲良くなった子どもと試合を見ながらおままごとをしました。おままごとごっこは、世界共通と知り感動しました。午後からキャンピングカーの展示があったので見に行きました。オーストラリアではキャンプが盛んで次買う車の下見に連れて行ってもらいました。そして日曜日はドライブで隣町にある Newnes State Forest に行き壮大な風景を楽しみました。そこに向かう途中の道が整備されていないため、道がデコボコだったり、雨水が溜まっていたりと車には厳しい道かと思いましたがお構いなくどんどん進んでいき、デコボコな道のドライブもたまにはいいなと思いました。とても充実した楽しい休日でした。



Newnes State Forest



フォストファミリー宅のテラス



フォストファミリーの車

4. シドニー観光

8月2日（金）にシドニーに観光へ行きました。

シドニーへは、船で1時間くらいかけて行きました。有名なハーバーブリッジやオペラハウスなどに訪れることが出来ました。ブルーマウンテンズ市とは違った街の雰囲気を感じることが出来ました。



ハーバーブリッジ



オペラハウス

他にもフェザーデール・ワイルド・ライフという動物園に行きました。カンガルーと触れ合うことが出来てとても楽しかったです。



木の上のコアラ



カンガルーの子どもと

行きと帰りの船からの眺めも良くとても楽しい観光になりました



考 察

1. 【発 見】疑問の発見

オーストラリアで上述のような楽しい生活を送ることができましたが、今回の学校生活で特に印象に残ったのは、共に学んだ生徒達の「自分の意見をしっかり発言する自信に満ち溢れた姿」です。帰国してからも、彼らのその自信はどこから湧いてくるのか？その心の強さは何なのか？と疑問を持ち続け、インターネットなどで調べていました。

ここからは派遣留学の中で目の当たりにした「オーストラリアの高校生の積極性」について掘り下げて調べていきたいと思います。

2. 【仮説の構築】「積極性」と「自己肯定感」の関係について

この学校の授業の多くが選択授業であること、学校が自由性を重んじていること、ひいては、オーストラリアの国民性など複数の要因が関係していると思いましたが、特に私の印象に残っていること：彼らが何かを発言する時の「きらきらした自信に満ち溢れた姿」を導き出すのは、自分の存在に対する「絶対的な自信」そのものであり、その自信の強さこそが輝きの根源ではないかという考えに至りました。

そこで「高校生の積極性」は、「自己肯定感の高さ」に比例関係しているのではないかと仮説を立て、調査を進めることにしました。

3. 【データ調査】子供・若者白書（内閣府：令和元年6月より）

子供・若者白書の特集1に記載されている「日本の若者意識の現状～国際比較からみえてくるもの～」によると、

- 日本の若者は、諸外国の若者と比べて、自身を肯定的に捉えている者の割合が低い傾向にあるが、日本の若者の自己肯定感の低さには自分が役に立たないと感じる自己有用感の低さが関わっていること
 - 日本の若者は、諸外国の若者と比べて、外国留学や外国居住を望む者の割合が低い傾向にあること
 - ボランティア活動の経験者や自分自身に満足している者の中には、外国留学を希望する者が多い傾向にあることとあります。また、
 - ・日本の若者は、諸外国の若者と比べて、自分自身に満足していたり、自分に長所があると感じていたりする者の割合が最も低く、また、自分に長所があると感じている者の割合は平成25年度の調査時より低下していた。
 - ・日本の若者は、自分が役に立たないと強く感じている者ほど自分自身に満足している者の割合が低かったが、同様の関係は諸外国の若者の意識には認められなかった。
- などと分析されています。
- ※参考資料として利用している「子供・若者白書」掲載部分については、別紙のとおり。

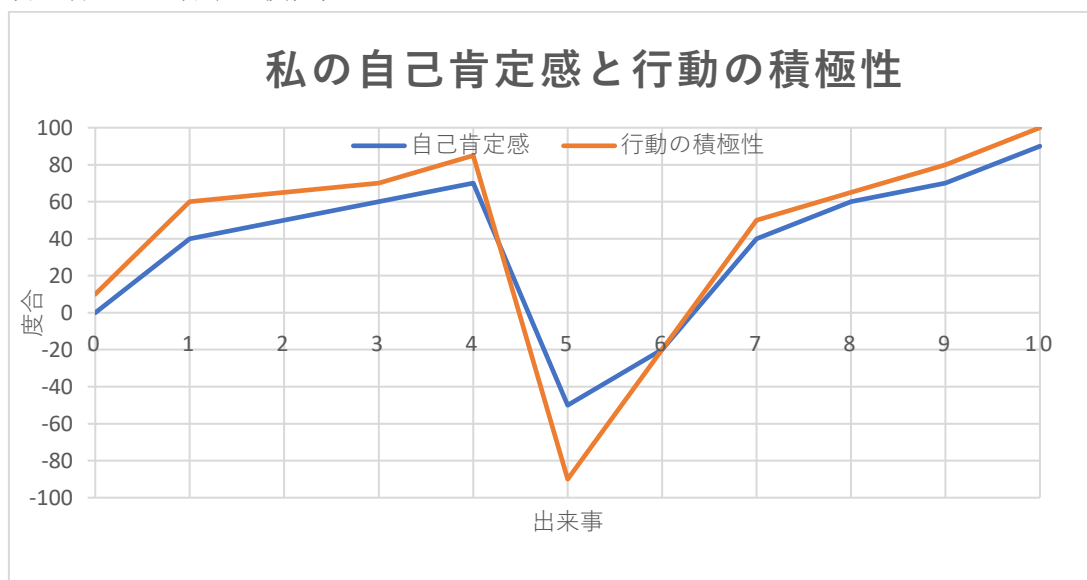
図表1 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成30年度）の概要

調査目的	我が国の若者の意識と諸外国の若者の意識を比較することにより、我が国の若者の意識の特徴及び問題等を的確に把握し、子供・若者育成支援施策の検討の参考とすることを目的とする。		
調査領域	(1) 人生観関係 (2) 国家・社会関係 (3) 地域社会・ボランティア関係 (4) 職業関係 (5) 学校関係 (6) 家庭関係		
調査対象国	日本、韓国、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、スウェーデン		
調査対象者	各国満13歳から満29歳までの男女		
調査時期	平成30年11月～12月		
調査方法	インターネット調査 (調査会社に登録しているモニターに対し、インターネットを利用して調査票を配信し、回答を依頼) ※13～14歳については、保護者に調査協力の可否を確認後、協力可能と回答した子供を対象 ※15～17歳についても、保護者に調査協力を依頼し、その子供から回答を得た場合がある。		
回答数等	国名	回答数	使用言語
	日本	1,134	日本語
	韓国	1,064	韓国語
	アメリカ	1,063	英語
	イギリス	1,051	英語
	ドイツ	1,049	ドイツ語
	フランス	1,060	フランス語
	スウェーデン	1,051	スウェーデン語

4. 【実体験の分析】

そこで、「自己肯定感」と「ボランティア体験」をキーワードとし、自分の今回の留学体験を振り返り、自身の自己肯定感の推移と自分のとった行動の積極性について分析を行い、今後の自身の取り組むべき内容を考えることにします。

<自己肯定感と行動の積極性のグラフ>



※「自己肯定感」の割合・「行動の積極性」の割合は、自身の感覚による。

※グラフ横軸（出来事）の数字1～10は、以下<内容>の表にある数字1～10と一致させている。

<内 容>

出来事	【青線グラフ】 感情（自己肯定感）	【橙線グラフ】 積極行動の内容
1 派遣生に選出された	選ばれて嬉しい 頑張りが認められてよかった	日常英会話の学習を進める、三田市・兵庫県・日本の特性を調べる
2 国際交流協会広報誌/バイン倶楽部に記事が載った (多くの方々からの激励があった)	褒められてますます嬉しい	現地でのプレゼン資料を頑張る(国際交流協会での研修受講4回) 豪国、ブルーマウンテンズ市等派遣先について調べる 喜んでもらえるお土産を探す(三田らしいモノ、日本らしいモノ)
3 出国時(国際交流協会の方に温かく送り出され出国)	準備万全、自信满满	笑顔で「いってきます」
4 到着後、ホストファミリーに笑顔で迎え入れられる	やった!到着した。達成感マックス	しっかり握手する!
5 現地生活で、自分の英語に対して”pardon?”の連続 言葉が通じない	自信喪失(自己肯定感マイナス領域!) もう帰りたい	貝のように沈黙する、まったく交流ができない
6 ブルーマウンテンズ市長への表敬訪問	代表として派遣されているということを 再認識	少しづつ声をかけ友達を増やす努力をする
7 現地校のアセンブリーでの自己紹介スピーチの成功 現地高校生からの賞賛、いろいろな人に声を掛けられる	準備していた通りにできた!	流しそびれていたフリクションペン30本を 英語で自己紹介しながら全員に配り終える 一緒にポケモンGOや日本の漫画などについて語る 現地のスクールライフを積極的に楽しむ
8 ホストファミリーとの別れ	本当にさみしい・もっと居たかった	この貴重な経験を帰国したら伝えなければ!と飛行機内で決意した
9 帰国時(国際交流協会の方が温かくお迎えいただき帰国)	この貴重な経験を伝えなければ!	笑顔で「ただいま」 報告レポートの作成を始める(次の派遣生のお役に立てれば…)
10 三田市長報告と新聞記事掲載 (さらに多くの方々からの賞賛があった)	選んでいただいて本当に良かった 「一生懸命伝える大切さを学んだ」と実感	姉妹都市への高校生派遣を経験させていただいた者としての 今後の役割を考えはじめる

○森三田市長表敬訪問の様子（神戸新聞より）

一生懸命伝える大切さ学ぶ

姉妹都市派遣の高校生2人 豪州の体験報告



ブルーマウンテンズ市での思い出を振り返る岡田龍人さん(左)と越川翔太さん(右) 三田市役所

夏休み中、三田市の姉妹提携都市・豪州ブルーマウンテンズ市に派遣されていた関西学院高等部3年の越川翔太さん(17)とあかしあ台1と、大阪教育大付属高等学校池田校舎2年の岡田龍人さん(16)が丘1が市役所を訪れ、森哲男市長に現地での体験を報告した。

国際的な人材を育てようと、市と市国際交流協会が1991年度から毎年、ブルーマウンテンズ市と高校生を派遣し合っている。2人は海外に行くのは初めて。7月26日～8月7日の日程で、ホームステイしながら高校に通い、観光なども楽しんだ。

英語が苦手だった越川さんは最初、文法や単語を間違えないよう話していたが、「Pardon? (もう一度言ってください)」と何度も言われて心が折れたと回想。一方、学校や街では大勢に話し掛けられて漫画やアニメの話題で盛り上がったといい、「片言でも一生懸命伝えることが大事だと分かった」と話した。

岡田さんは、現地の生徒らが休み時間になると学年にかかわらず仲良く話したり、授業で自主的に答えたりする積極さに驚いたという。帰国後もホストファミリーとメールで近況を報告し合っており、「刺激になったし、人の心の温かさも感じた。また行きたい」と目を輝かせた。

(山脇未菜美)

2019. 8. 29 (木) 神戸新聞 朝刊

5. 【今後の展望】私自身のこれからの取組について

現在、私自身の自己肯定感は高まり続けています。それにより、今までの活動の幅を広げたり、新たな取組にチャレンジしようという意欲が増してきました。

今後は、以下の2つについて取り組みたいと考えています。

① 積極的に異文化交流を行う

学校では、二学期から学校の選択授業でインドネシアの高校生とスカイプを繋ぎ、地域や国際問題の解決方法を考え実行していくプログラムに参加しています。

この授業でも積極的に国際交流を行いたいと思っています。

また、これからは三田市の姉妹都市派遣高校生として、同じように貴重な経験をされた先輩方とOB・OG会を通じて交流を深め、次回以降の高校生留学生派遣に対してもお役に立てるよう積極的に取り組みたいと考えています。

② ボランティア活動の継続

私はコンピューター部にも所属しています。ボランティア活動の一環として、近期中に小学生を招きプログラミングの講習会を企画しています。このような場でも、僕の貴重なこの留学体験を話し、国際交流の必要性を伝えることができればよいと思っています。一步を踏み出し外の世界を見ることが実は自分の自信を得ることにつながるといふことも伝えていきたいです。

そして、これらの活動を通じて大学での専攻分野の学びに備えていこうと考えています。

終わりに

私にとって初めての海外でのホームステイであったため、最初はきちんと会話ができるか、何か問題を起さないかなど、緊張や不安もありました。しかし、オーストラリアの人たちの温かさ、優しさに触れ、英語での会話が成り立った喜びを知るとともに「一生懸命伝えることの大切さ」を体得し、確かな自己肯定感の高まりを感じることができました。このように沢山のことを得た2週間という期間を経て、オーストラリアの文化や自然に触れ異文化を理解することの大切さを痛感しました。

また、英語は学校でテストのためにやるものではなく、言語の異なる者達がコミュニケーションをとるための大切なものだと思改めて気づかされました。

今回の派遣では、もう一人の派遣生である岡田君やホストファミリーの皆さん、国際交流課の皆さんなど多くの方に助けていただき、声掛けをいただきました。この場をお借りしお礼申し上げます。この海外派遣で学んだことを今後の自分の生活や、三田市の姉妹都市との友好交流の発展に生かせるように、励んでいきたいと思います。